様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２００１０

研究課題名（和文）プラグマティズムの展開と現代における意義

研究課題名（英文）The Origin and Deployment of Pragmatism and its significance

研究代表者
戸田　剛文（Toda, Takefumi）

京都大学・人間・環境学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：３０４０２７４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：プラグマティズムは、２０世紀を代表するアメリカの哲学思想であるが、その源流となるものが近代のイギリス経験論に多く見いだされ、ロックやバークリの観念説を経由し、常識哲学の祖とされるトマス・リードによる観念説の批判的検討を経て、アメリカのプラグマティズムの祖であるパースに受け継がれていることを明らかにした。これらの長い歴史的な研究は、プラグマティズムに特徴的だとされる世界観が、それ以上に大きな歴史的潮流を持つことを示し、時代を超えて現代に生きるわれわれにも通じうるものであることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：Pragmatism is known as the typical American philosophy. But we can find it is much influenced by modern philosophy. Especially I made it clear that the early British empiricism has pragmatistic feature in it. This consideration shows that some important pragmatistic ideas are not so new and that they are our diachronic ideas.

研究分野：哲学

キーワード：哲学　認識論　イギリス経験論　プラグマティズム

１．研究開始当初の背景

特にリチャード・ローティやヒラリー・パトナムといった世界的に影響力をもつ哲学者たちによって、現代においてプラグマティズムは、非常に多くの注目を集めている哲学的立場であると言える。その現代のプラグマティズムは、１９世紀後半から２０世紀前半において活躍したパース、ジェイムズ、デューイらをその思想的源流とするが、それは、まさしくアメリカを代表する哲学的思想であるとしばしば考えられている。しかし、パース、ジェイムズ、デューイが、多くの近代以降の哲学者の影響を受けていることはすでに知られており、プラグマティズムはアメリカだけの哲学的思想ではない。特に、われわれの知識の可謬性や、われわれがすでに持っている諸信念と真理の関係などに目を向ければ、プラグマティズムとイギリス経験論にはきわめて共通する部分が多い。申請者は、これまで近代イギリス経験論の研究に長年携わってきたが、本研究は、その成果をもとにして、近代イギリス経験論とプラグマティズムの関係に焦点をあて、われわれの世界観に、異なる時代や思想を通して共通するものがあることを確認し、それによってわれわれの世界観を考察するものである。

２．研究の目的

本研究では、アメリカを代表する哲学の立場であるプラグマティズムの系譜を再確認し、その現代における可能性と意義について考察する。その源流として、特にイギリス経験論に注目する。というのも、プラグマティズムのコアとなる思想には、反デカルト主義的な要素、特に、反基礎づけ主義、可謬主義といった要素が含まれており、これは、申請者のこれまでの研究から、近代のイギリス経験論においても極めて主要な考えであると言えるからである。そのような点を基にして、イギリス経験論とプラグマティズムとの関係を明らかにすることで、プラグマティズム的な思想が歴史的に広範に行き渡ったものであることをつきとめ、哲学と時代の関係を研究しつつ、現代へとその考察を向ける。

３．研究の方法

（１）近代のイギリス哲学を中心に、特に認識論的な側面から哲学者たちの思想を整理し、プラグマティズムの中心的な思想と比較研究を行う。特に文献研究が中心となる。

（２）学外の研究者を招聘し、近代哲学の重要概念などについて講演会などを開催し、意見交換などを通して、研究を深める。

４．研究成果

（２４年度）

２０世紀にプラグマティストとして活躍したリチャード・ローティの立場が、近代におけるバークリに代表される観念論的な立場とどのような関係をもっているのかということを研究した。ただし、歴史的な影響関係を研究の端緒としているわけではない。ローティは、自らジェイムズやデューイの影響下にあることを認め、伝統的な認識論を激しく批判しつつも、ローティーの議論には、バークリのような哲学者の主張と類似した点がみられる。まずはその点を明らかにし、そしてその後、どのようにしてそのような思想が形成されてきたのかという可能性を探った。

本研究では、これまで申請者が行ってきたイギリス経験論研究を手掛かりに、バークリの自然法則に関する議論が、自然科学を道具的なものとして扱うプラグマティズム的な側面をもっているという可能性に着目した。確かにバークリ自身は、時代的制約の中で、強い「実在観」をもっているが、その部分を差し引くならば、彼の議論には現代のプラグマティズムに通じるものがあると考えられる。

また、バークリ哲学が、のちのＪ．Ｓ．ミルなどに与えた影響をも手掛かりに研究を進めた。ミルは、バークリ哲学について中心的に論じている著作があるが、ローティに大きな影響を与えた哲学者のひとりであるジェイムズもまたミルを極めて高く評価した哲学であり、間接的な仕方で、ローティの思想形成に影響を与えている可能性は十分にあることを指摘した。

（２５年度）
２４年度は、近代のイギリス経験論哲学において、現代のプラグマティズムの萌芽とも考えられる主張が見いだされることを明らかにしたが、２５年度は、その研究をさらに詳細に推し進めた。特に、イギリス経験論の代表者の一人であると考えられているバークリによる自然法則の主張は、当時のロックなどに代表される自然主義的な哲学に対するひとつのアンチ・テーゼとしても考えることができるが、それが現代のプラグマティズムの中心的なテーマの一つである多元的な世界観の擁護と大きな類似性があると考えられることを明らかにした。

そのさい手掛かりとしたのは、バークリによる心身問題に関する主張であり、当時の生理学と彼の観念論がどのように両立しうるのかという議論を軸に行われた。バークリは、当時の観念の生成のメカニズムに関する生理学的成果をすべて否定しているわけではなく、それもまたひとつの自然法則であり、それは絶対的な実在についての主張ではなく、われわれの一つの捉え方である。そしてわれわれの意識に生じる日常的な経験についての捉え方もひとつの自然法則である。これらの自然法則は、一方が客観的・絶対的で、他方が主観的で相対的という単純な二分法によってとられられるべきものではない。むしろ多元的な世界の捉え方の一例をなすものであると考えられるべきである。そしてこういう彼の主張は、現代のローティやグッドマンなどとも大きな親和性を持つものだと考えられる。

（２６年度）
２５年度は、イギリス経験論のバークリ哲学におけるプラグマティズム的な側面に目をむけて研究を進めたが、今年度は、これまでの研究を踏まえて、さらに範囲を拡大し、バークリとジョン・ロック、および古典的プラグマティズムの代表者であるパースとウィリアム・ジェイムズの世界観の関係の研究を行った。
ジョン・ロックは、デカルトのような基礎づけ主義とは異なり、当時の自然科学を前提として哲学を展開した。そのとき、ロックは実在論の立場から哲学を展開しているが、バークリは、むしろその実在論を観念論の中に組み込もうとする方向で哲学を展開している。この対立構図は、しばしば客観的なものとして世界をとらえるのか、主観的なものとして世界をとらえるのかという対立としても捉えられることがある。しかし、両者の議論を改めて検討することにより、この主観主義と客観主義の対立は、それほど明確なものではないことが明らかとなる。
そしてこのロックとバークリのような関係は、アメリカのプラグマティストであるパースとジェイムズの関係と同じような構造をもっている。プラグマティズムはイギリス経験論からも多くの影響を受けおり、両者に類似関係が見出されること自体は、必ずしも奇異なことではないだろうが、この研究では、大きな両者の類似関係を確認しながらも、その違いにも着目し、その比較検討を通して、主観性と客観性の関係を探ろうとするものである。そして主観性にも客観性にも還元されない、一種の二元論の可能性が示唆される。

（２７年度）
２７年度は、まずイギリス経験論の代表的哲学者の一人であるロックと、観念論を終生批判し、常識哲学の祖として捉えられるリードの立場を比較検討しつつ、この異なる立場に属する哲学者の立場においてさえ、プラグマティズム的な要素が大きな地位を占めていることを明らかした。リードをここで取り上げる一つの理由としては、リードは、のちにプラグマティズムの祖であるパースに大きな影響を与えており、パースはリードの思想を発展させる形で、批判的常識主義を標榜した哲学者だからである。

具体的には、両者はすでにわれわれが持っている基本的な信念をその哲学的枠組みとしてとらえ、その中で、われわれの知識の可能性を論じようとするものであり、それは、方法的懐疑により、確実な基礎づけによって知識の体系を考えるデカルトとは大きく異なるものであるということを示している。そのような立場は、プラグマティストの一人であるパースなどに通じるものであり、そしてそういったしばし異なる哲学学派に属するととらえられる哲学者たちに共通する世界観があることを明らかにしつつ、それがわれわれのものの見方を考察するうえでどのような手掛かりとなるかを明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

1. Takefumi Toda, “Pluralistic solution to mind-body problem : Berkeley and Pragmatsm,” *Menschenontologie* 20, 2014, pp. 86-96.

2.戸田剛文、「実在と信念 ロックとバークリ、パースとジェイムズ」、人間存在論 21 巻、2015．87-99

3．戸田剛文、「ロックとリードによる懐疑論批判 ―プラグマティズム的観点から」、『人間存在論』第 22 号、2016 年、頁未定。

〔学会発表〕（計　1　件）

1. Takefumi Toda, “Mind-Body Problem: Berkeley and Pragmatism,” Taiwan Metaphysics Colloquium, National Taiwan University, Taiwan, October, 2013.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

戸田 剛文（TODA TAKEFUMI）

京都大学大学院・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：30402746

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：